
水霊の巫女

奈備 光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

水霊の巫女

【Nコード】

N8950H

【作者名】

奈備 光

【あらすじ】

18世紀初頭、イギリスの貴族の娘が行方不明に。庭園の完成を記念して行われるパーティを前にしてのことだった。ひとり取り残された老婆は、何を語ろうとするのか。

プロローグ 「泉」

ランタンの淡い光が、足元をわずかに照らしだす。

歩みとともに、地下通路のごつごつした石肌に、複雑な形の影が揺れる。ゴウゴウと音がこだまして、近くに水の流れがあることを知らせている。

少年は心細くなって振り返る。

通ってきたばかりの細い通路は、既に一面の闇に包まれ、遺跡の薄暗い広間はすでに見えない。

「ロン。大丈夫？」

「はい！ お嬢様！」

少年は前を向き、余裕のある歩調で進んでいく男と少女の背中を見つめた。

「怖がることはないわ。お父様の後をしっかりついて来ればいいのよ」

少年は息を吸い込み、ランタンを持つ手を突き出して、また一歩と進み始める。

水音が大きくなり、湿った空気がますます冷たい。

曲がりくねったゆるい下り坂が続いていた。

両側の壁が狭まり、天井が低くなってくる。男は上背のある筋肉質の体をかがめて歩んでいく。

少年は天井に触れてみた。

まわりの壁も床も天井も、先ほどまでとは違って、滑らかな岩でできていた。力強い水流に、長い年月をかけて削り取られた巨大な

岩のようだ。

水音が急に大きくなった。と、岩壁が遠のいた。
こだまする少女の声。

十メートル四方ほどのいびつな形の空間に出ていた。

暗い天井に伸びた男の影。

自然の造形力によって地中深く築かれた聖堂……。
穿たれた浅い棚に古びた一對の燭台……。

少女は感嘆の声をあげているが、男は見知った様子で、床にあるものに注意を向けている。

敷き詰められた丸石。

そして豊かな水が、床の割れ目から、ほとばしる勢いで湧き出ていた。

水は奔流となって聖堂の中ほどを駆け抜け、巨岩の隙間に吸い込まれるように流れ去っていく。

隙間は少年が入っていけそうなほどの大きさがあ、小道がついていた。

しかしその先、奈落は、ランタンの光さえ、なにものも照らし出さないのではないかと思えるほどの黒一面の闇に包まれていた。

男の足元に黒っぽい布切れが落ちていた。

「うっ」

布切れから、白骨化した人の手足、そして頭蓋骨が突き出ていた。

「恐れることはない」

男はそう言つて、部屋のあちこちにランタンの光を投げかける。

水飛沫が床の丸石を、そして白骨を濡らしていた。

揃えられた皮のサンダルと帽子。藍色の衣服の上に木のブローチ。それらは、まだかろうじて原形を保っていたが、やがて形を失つてゆくのだろう。

背筋を伸ばした細い骨。天井を睨む眼窩。

巨石に囲まれた洞窟の中で、漆黒の闇の中で朽ちていった死体。

ランタンの光に照らし出されて、際立つ白さをさらし、絶えることのない水音の中で、静まりかえっていた。

少女が、地下水の流出口の脇に屹立している一枚岩の陰を覗き込んでいた。

岩は両腕を広げたほどの幅があり、表面に丸い植物の葉らしき文様が彫り込まれていた。

白骨の上にあるブローチと同じ文様……。

「お父様！ これ！」

少女のランタンが照らし出しているのは、岩棚の上に伏せてある大きな水差しだった。

「銀だ」

照らし出された遺物は、磨き抜かれた金属本来の輝きを見せていた。

「お父様、取っ手にロープが」

結わえられたロープは、傍らの岩の突起にぐるぐると巻きついて

から、地下水の奔流の中に伸びていた。

男はランタンを岩棚に置き、重さを確かめるように水差しを取り上げた。

水差しの内側をじっくり確かめてから、元あった位置に戻す。

そして、結わえてあるロープを解こうと試みた。しかし結び目は、洞窟の湿気によって固定され、緩めることができない。

少女が、白く美しい手が汚れることもいとわずに、水流に伸びたロープを引っ張り始める。

男も少女の後ろからロープを握る。だが、水流は重い。

「ふふふ。さあ、もう一度、お父様！」

少年も加わり、三人は反動をつけてロープを引いた。

第 1 章 「館」

ファインコルトは、招待客が万が一、庭園の作業小屋を覗いたときにも平然としていられるように、スコップを磨き上げ、肥料袋やロープなどを片付けていた。

何日もかかって園路沿いの枯れ枝を払い、絡まった蔦をあくまで自然風に整えていた。

そして遺跡にさえも足を向けていた。

ファインコルトが遺跡に立ち入ることはめったにない。

ウィルストロング伯爵が使用人や村人が立ち入ることを好まなかったからだし、ファインコルト自身もあえてそこを歩きたいという気がなかったからだ。

しかし今回は違う。

残された建物を覗き、小道では大きな瓦礫を脇にどけ、ぬかるみに砂利を入れ、古い井戸を覗いてみた。

午後にはウィルストロング伯爵とその次女ガリーが遺跡を巡回し、ファインコルトの息子ロンがその供をする予定になっていた。

ガリーが出かけるときには必ずロンが呼ばれる。双子の長女コティと違って、ガリーは小さい頃から草花に興味を持ち、庭師であるファインコルトの話を聞くことが好きな少女だった。

身分は違うが、ガリーとロンはいわば幼馴染である。

ロンがウィルストロング伯爵の供をして遺跡に入るのは初めてのことだ。

ガリーが一緒とはいえ、ファインコルトは不安を感じていた。息子の手に負えないことを言いつけられるのではないか。あるいは村の者として許されないことをさせられるのではないか。

ファインコルトは念のために、午前中に自分もひと回りしておこうと思ったのだった。

ファインコルトは館への帰りを急いだ。

腰につけた鎌や鋏がぶつかり合って派手な音をたてる。たくましい腕から汗が噴き出している。

ハッとして立ち止まった。

見ると、少女。

灌木の茂みの中から顔を出し、ファインコルトを見上げていた。

「やあ、マリー」

ファインコルトは口ひげの中でフウツと小さく息を漏らした。村のよろず屋の娘だ。

「おじさん、こんにちは！」

「珍しいね、こんなところで会うなんて。家族はみんな、お屋敷でお手伝いかい？」

「うん。私もさっきまでお屋敷にいたの。ねえ、これ、採っても叱られないでしょ？」

「もちろんだよ。お母さんがおいしいジャムを作ってくれるよ」

少女はキイチゴでいっぱいになった籠を掲げてみせた。

「ハハ、がんばったね。気をつけて帰るんだよ」

「ありがとう。でも、もう怖い目にはあつたわ」

ファインコルトは歩きかけた足を止めた。

「さっき、大けがをするとこだったの。暴れ馬よ」

「暴れ馬？」

「パープルサンダよ。いい気なものね。みんなが忙しく働いているというのに」

マリーは頬を膨らませて、大人びたことをいった。

「そうか……。けがはないかい？」

「平気。ちょっと転んだだけ」

「見せて」らん」

マリーは右足を投げ出した。膝にまだ乾ききっていない血の跡がある。

「たいしたことはない。大丈夫だよ」

ファインコルトの太い指が、腰につけた皮袋から小さな木箱を取り出し、ぎっしり詰められた葉の中から一枚抜き取った。

「あつ。ホブリイの葉ね。これ、しみるんだなあ」

「そうだよ。よく知っているね」

ファインコルトは葉を少し揉んで、マリーの膝に押しつけた。

「ありがとう。ファインコルトおじさん」

「それで、お嬢様は？」

「そのまま行ってしまうたわ」

「ふーん、お供は誰も？」

「うん」

「でも、これくらいのけがですんでよかったね。さ、そろそろ村にお帰り。また暴れ馬に会わないうちにね」

ファインコルトはニコリとする。マリーも笑った。

太陽は天空に登りつめていたが、汗は引いていた。

「今度また、お屋敷に遊びにおいで。果樹園を見せてあげよう」

少女と別れ、ファインコルトは歩き始める。

先ほどまでとは違い、ゆっくりとした足取りだ。

やがて小道は広い道に合流する。数キロ離れた主街道から館へと向かう道だ。

周囲には耕作地や牧草地が広がり、スズカケの並木が続く。二つほど緩やかな丘を越えるほかは、ほぼ平坦な道である。

ファインコルトは道から外れて、小川に降りて行き、念入りに顔や腕の汚れを洗い流した。

館は近い。まもなく並木は途切れ、緩やかに弧を描くサンザシの緑廊が館の北へ大きく迂回して、メインエントランスに導く。

ファインコルトは腰から鋏をはずし、目についた枯れ枝を切つて背中の籠に入れ始める。

籠がいっぱいになると、道から外れた林の中に、中身をまき散らして捨てた。

緑廊を抜けると、眼前に館が全容を見せた。

象徴的な整形庭園の名残を留めるフラットな円形の芝庭。その中央を、直線的なアプローチが貴族のカンツリーハウスに向かって伸びている。

建物は東西約百メートルの規模を持つ石積み造。

屋根に立ち並ぶ尖塔や飾り煙突が荘厳なリズムを刻み、バロック建築の初期の様式を表現している。

エントランスには幅の広い十数段の石段。

基壇には大庇を支える太く飾り気のない列柱。

多くの金属装飾が埋め込まれた巨大な木製の扉。

明後日、数年ぶりにこの扉が開け放たれるとき、高い吹き抜けのあるエントランスホールとレセプションホール、すなわち数百人の老若男女がいつせいに踊れるほどの広さを持ち、贅を尽くして飾り立てられた空間が、ウィルストロングの客達があげる哄笑で満ち溢れることになる。

アルツミラー伯爵家。

西部湖水地方の旧家。

ロイ・ウィルストロング・アルツミラー伯爵は、十二年前にこの地を相続し、ロンドンから移り住んでいた。

一七五三年春、館では盛大な祝賀会が催されることになっていた。ウィルストロングのグレイトチエル財団常任理事就任が認証されたことを祝って、ウィルストロング自身が開催するものである。また昨秋に概成となった大庭園の披露を兼ねるものでもあった。

館の外壁改修や汚れ落としといった大規模工事から、床タイルの欠けや目地の補修、日焼けたカーテンの掛け替え、カーペットのほつれ直し、傷んだ扉や腰壁の補修、シャンデリアの架け替えなどの小工事に至るまで、祝賀会の準備はここ数ヶ月の間、休むことなく続けられてきた。

今日、祝賀会の前々日ともなると、どこもかしこも慌ただしく人々が行き交い、熱気が立ち昇るかのような緊迫感に溢れていた。

使用人達や臨時に雇われた村人達の手によって、手すりやドアハンドル、窓枠や洗面ボウルなどが磨き上げられ、すべての寝室のベッドカバーがぴんと張られ、家具調度品が置き直されつつあった。そしてさまざまな食材やスコッチやワイン、果物や珍しい氷菓子、花や贈り物など様々な品物が次々と運び込まれていた。

数十人の貴族や百人を超える各界の名士、そして彼らの従者らを迎える準備が大詰めを迎えていたのだ。

ウィルストロング自身も、ぬかりなくホストを勤めるために、館内はもちろんのこと、広大な庭園をくまなく廻り、すでに練りに練ったアトラクションプログラムを修正しては、使用人たちに自ら指示を出していた。

第 2 章 「丘陵」

ファインコルトは建物の横手に回った。

「お帰り、暑いね」と、馬の世話をしている男が声をかけてきた。

「クソたれの暑さだ。草がやたら伸びる」

「へん！ 庭の仕事は楽ちんなもんだろ。昔と違って、雑草は伸ばしておけっただから」

「ふん。伸ばしておくんじゃないくて、伸ばし放題のように見せておけってな。倍から手間がかかる。おい、ロンを見かけなかったか」

「とつくに旦那様と出かけたぜ」

「ん？ 昼からだと聞いていたんだが」

「気が変わるんだよ、すぐに」

南庭に出た。

幅の狭いテラスが、広大な芝生の内庭を突き抜けて、一直線に伸びている。

輝くような白い石でできたテラスは、庭園を真つ二つに切り取り、視線に明快な方向性を与えていた。

右には澄んだ水を湛えた池。緑の縁取りが美しい。対岸には白いあずまや「白空亭」と石敷きの広場。そこから池越しに建物を見る景は、館一番のピクチャレスクだと言われている。

テラスの左手には、果樹園を内包する疎なニレの林。そしてテラスの正面、象徴的な白い直線の先は視界が開放され、見渡す限り緑の野の風景が広がっている。

午後に置いて回るつもりで、荷車に山積みしておいたかがり火用の鉄籠が、引き出してきたままの状態で置かれていた。

それを移動させようとしたとき、ガリーとロンが歩いてくるのが見えた。

フラインコルトはその様子に胸をなでおろした。

「騒々しい！ どうしたのだ！」

怒鳴りつけられた使用人は、帽子に手をやり軽く頭を下げた。

「へえ。お嬢様が戻られないと、奥方様が……」

ウィルストロングは最後まで聞かず、くるりと背を向けると館の中に入っていく。

「グッチホルド！」

呼ばれた男が、お帰りなさいませ、とホール脇の小部屋から出てきた。

「コティがどうかしたのか！」

「はい、お勉強の時間になりましたのに、お屋敷にお戻りになりませんので。今からお探し申し上げようとしていたところです」

ウィルストロングは外に眼をやった。

明るい光の中、ガリーが歩いていく。馬の手綱を引いて、庭師の息子が従っている。

背景には、幾重にも連なるなだらかな緑の丘と、金属の破片のような鈍い光を放つ細長い水面。

緑色のカーペットの上に点々と置かれた白いフィギュアのような牛の群れ。

さらに遠く、幾筋かの菜の花畑が黄色の鮮やかな稜線を描く。その先は空だ。

丘の稜線や湖の岸边に目を凝らす。

「どこへ行ったのだ」

「旦那様とガリー様を追っていかれたのかと……」

「なぜ、お前まで出かけようとしている」

執事は、奥様が、と口ごもった。

「コティが出かけてからまだ二時間ほどだな。そのうちに帰ってくる。放っておけばよい。使用人達を式典準備の持ち場に戻らせよ」
「かしこまりました」

いつもなら指示をすぐに実行に移す律儀な老使用人が視線を落としている。

「なにをしている」

「はい。あの、旦那様、お手に血がついております」

「ああ、けがをした」

「お手当てをしませんと」

ウィルストロングの目の下に、わずかな笑みが浮かんだ。

「遺跡でもしろいものを見た。銀の水差しだ。ロープが結わえられていて……」

花を抱えた村の女が通りかかり、ウィルストロングは口をつぐんだが、すぐに付け加えた。

「庭園の余興を追加する。ランタンを五つばかり用意しておけ」
かしこまりました、とグッチホルドが立ち去った。

あそこは少人数で入る方が面白い、とウィルストロングはつぶやいた。

第 3 章 「四風亭」

ファインコルトは、庭園のあずまや「四風亭」にかがり火を灯す準備を終えた。後は式典当夜になってから薪を放り込めばいい。

ロンはあずまやの裏に積んだ薪が乾燥していることを確かめている。

遺跡から帰ってきたロンの顔には、ウィルストロングの供を無事に果たした誇らしさがあつた。

今日の経験を、ロンが自信をもって自分のものにするため、遺跡であつたことは聞かずにいてやろう。そう考えながら、ファインコルトはいつものように館から死角となつている切り株に腰掛けた。

四風亭は、かつて、原生林の中、村人達が狼横手と呼ぶ小広場に建っていた。

この地方では産出しない白い石で作られた基壇と、左右二列、八本の列柱。うつそうとした暗い森の中に忽然と出現する白い神殿風の構築物。

季節ごとに催される村人達のレクリエーションの場であり、村の伝統行事「時のおうな祭」の場。

そして子供達の冒険の場でもあり、恋人達の語らいの場でもあつた。

ファインコルトは帽子を脱ぎ、髭をしごいた。

移設された四風亭を眺める。

ここに佇むとき、いつも同じ記憶をなぞるのが習慣となっていた。

「旦那様、お呼びでしょうか」

「おまえ、あのあずまやを移設しないように言っておるそうだな」
それは、新しい館の主、ウィルストロングに仕えることになって
しばらくしてからのことだった。

「はい、畏れながら、あの四風亭は……」

「地下に村の水源があるというのだな。くだらぬことを。そうだと
しても、あずまやの移設が、地下水と何の関係がある」

「お言葉ではございますが、四風亭と教会と井戸とは、とても重要
な位置関係にあると言い伝えられて……」

「黙れ！ 使用人であるおまえの迷信など、聞くつもりはない！」

アルツミラー家の庭師であるファインコルトは、それまで不満を
漏らすことなく、領主に仕えてきた。

前の伯爵からは庭の管理を任されていたし、庭のことでアイデア
があっても、まずはファインコルトに相談を持ちかけてくれた。

しかし、新たな領主、ウィルストロングはファインコルトを庭の
掃除屋くらいにしか扱わなかった。

空気の流れや水の流れ、土の性質や岩盤の様子などはもちろんの
こと、どこにどういった植物の群落があるか、狐の住処がどこにあ
って、鹿の通り道がどのように繋がっているのか、ということまで
熟知していたにもかかわらず、一言もそういったことについて聞か
れることはなかった。

そして、鞭打たれたファインコルトの背中が癒える頃、四風
亭は森のはずれに移設された。

館から望む庭園の点景として。

かつて、森の中の四風亭がまもっていた幻想的な物語の衣を引き
剥がされて。

子供の頃のファインコルトが信じていた、森の小さな精霊達の舞踏場という伝説を生んだ厳肅さも打ち壊されて。

ここで過ごした忘れられない夜もある。

八年前。病に倒れた妻パーラを弔った次の夜。

まだ幼かったロンと、ふたり残された家族として最初の話をした。星のきらめきが、かすかな金属的な音をたてているかのような寒い夜のことだった。

「庭は目で見える形にこだわるより、心で見ることができるかどうかが大切だ。中身のない演出より、暖かい感動を得られるかどうか。庭は自然を扱うもの。木や草や、無数の生き物を扱うのが庭づくりだ。むしろ、自然の営みに共に参加すると言った方がいいかもしれない」

母親の死の意味を、まだ芯から理解することさえできない幼いロンには、そんな父親の言葉は受け止めようもない。

ファインコルトは、妻を失った悲しみを、やるせなさを、もって行き場のない怒りを、庭園についての自分の思いを息子に矢継ぎ早やにぶつけることで紛らわせようとしていたのだった。

「父さん。前に話してくれるって言ってた銀嶺川の秘密って?」

ロンの声が、寒さに震えていた。

「この森の奥、そうだな、半日ほど行くと、巨岩で覆われた小高い山がある。お屋敷の三階からは見えるぞ」

「へえ、父さん、お屋敷の三階に行ったことあるの!」

「あるさ、昔な。銀嶺川はその岩山の麓で生まれる。ゆっくりと森の中を流れてくるが、この先で地中に潜るんだ。狼横手よりもう少し奥の森の中で。地下を流れる伏流水になるんだよ。その地下水の

一部が、教会の下を通って井戸に流れていく」

この話もロンにわかうはずがない。

しかしファインコルトは、地面に、以前の四風亭と教会と井戸の位置関係を示す細長い三角形を描いてみせた。

「四風亭が以前あった狼横手の地下には、大きな岩盤がある。それに阻まれて地下の川は流れる向きを変え、教会の地下に至り、再び向きを変えて井戸に至る。つまり、地下の水脈がこんなふうに蛇行しているんだよ。そして、もう少し西に下った赤羽橋のところで地表に出てくる」

ロンが頷く。

「四風亭や教会や井戸は、この辺りの地下を流れている水の流れの、要の位置にあったんだ。どうだ、不思議だろ。伏流水の向きが変わるところには村にとって重要なものがある。四風亭と教会。それに井戸。水霊せいれいモナエドの紋章の葉っぱが三枚であることにも、意味があるのかもしれないね」

「へえ」

「でも、モナエドの由来について、確かなことはわからない。誰にも説明できないことは、迷信ということになる」

「迷信って？」

「その三つのもののうち、ひとつでも欠けると、村に災いが降りかかると言われているんだ。災いを避けるためには、水の精霊モナエドの力を借りなければいけない。そういうことだよ。でも、これだけじゃあ、何のことかわからないだろ」

「うん。でも、だからお母さんは死んだんだね」

楽しい音楽や賑やかな声が、風に乗って流れてきていた。

館にたくさんの方が見えていた。

ウィルストロングの双子の娘達が、六歳になったことを祝う盛大なパーティを演出するために、ファインコルトが用意したかがり火もその中にあるはずだった。

「寒くなってきたな。さ、帰ろうか」

ファインコルトは自分の上着を脱いでロンを包み、今日は特別だ、と言って抱き上げた。

第 4 章 「庭」

ウッドステイック村の成立の経緯は定かではない。

しかし村人の歴史的関心が及ぶ三百年は優に越えているのは確かだ。

人口約五百。数十年間、変化はない。近郷ではそれなりに大きな規模である。

村人の多くは牛や羊を飼い、畑を耕していた。

家並みは一筋の丘の上に築かれていた。教会は小さいながらも尖塔をそびえさせ、街道を行き交う人々に村の存在を示していた。

教会前の広場には、豊かな地下水を利用した噴泉が設えられ、日の光を浴びて子供達が走り回っていたし、村の婦人達がおしゃべりをしながら、教会の庭の手入れをしているのを見かけることもあった。

四風亭が移設された翌年、パーラが死ぬ前の年。

村人達が広場に集まっていた。

グラスネイク村長は、スチム神父と共に教会から姿を現し、村の長老達と言葉を交わした。

まもなく、太った体を演壇の上に運び、村としての決定を伝えることになる。

集まった村人は、これまでもう何度も議論してきたことを、今が最後とばかりに言い争っていたが、教会の鐘が午後一時を告げたのを機に、徐々に静かになった。

「諸君！ 村としての決定を伝える。最初に、結論を言おう！」

村長の言葉に、広場は静まりかえり、噴泉の水だけが軽やかな音をたてていた。

「ウッドステック村は、伯爵様の要請を受け入れることにした！」
村人達の口から一斉に発せられる悲鳴と怒号。

グラスネイクは、大きく両腕を広げた。

禿げ上がった頭をめぐらせて、ひとりひとりの顔を見るように大きな目で眺めまわし、聴衆が理性と良識を取り戻すことを促した。

「もはや言うまい！ よいな！ 理由は改めて話さなくてもよいじやろう。わしは、皆を信じておる！」

グラスネイクは、よく通る声で聴衆に語りかけた。

「村を離れるのは悲しい。思い出も限らない。教会もこの広場も、なにより住み慣れた家も裏庭の木々も、モナエド様の像も、道端の石ころさえも、何もかも離れがたいものばかりじゃ」

雲一つない空に、風に逆らった渡り鳥の群れが通り過ぎていく。

「そして、今まで通りに仕事ができるのか。村の財産である畑や牧場、桟橋はどうなるのか。まだわからないことも多い。皆も不安じやろう」

グラスネイクは言葉を切り、胸ポケットのハンカチをいじった。

「しかしじゃ！ 伯爵様をご用意された新しい村を、皆もすでに見に行ったことじやろう。で、どうじゃったか」

ハンカチで頭の上を拭いた。

「想像以上に立派なものじゃった！ どの建物も頑丈で広くて風通しも良い。そしてなにより、この村と同じようじゃ。やはりわしの家はハリー爺さんの隣じゃ。わしは、わしらの村は、あそこでの暮

しに希望を持ちたいと思う！」

すすり泣く声が聞こえた。

グラスネイクは厳かに宣言した。

「皆で新しい村に移転する！」

唇をかみ締めて村長を見つめる男。

幼子を抱きしめて目を閉じる女。

地面にしゃがみこむ老女。

怒声を上げてこぶしを突き上げる若い男達……。

「引越しの開始は二週間後じゃ。よいか、村の者の気持が、ばらばらになってはいかん。遅れることは許さぬ。冬が来る前に、全員揃って移転を終える。よいな！」

グラスネイクは、ひとりの老婆が、広場から出て行こうとしているのを目の隅で見た。

大きく息を吸い込み、呼び止めたいという気持を抑えた。

老婆の名はイレース。

村外れの粗末な小屋に住んでいた。

水霊の巫女。

村人達の求めに応じて、まじないを施す呪術師。

しかし、急速に進展した産業化という時代の流れと共に、この老婆に術を頼む者も少なくなり、加えて潔癖な強情さが疎ましがられて、やがてひとり隠れるように暮らすようになっていた。

イレ－又は移転に応じようとしなかった。

「そこまで言うのなら、グラスネイク、お前たちだけで、行くがよい。村の尊厳も、モナエドの加護も捨ててな。わしはここに残る。わしには守るものがあるのじゃ」

そう言われて、グラスネイクは傷つき、老婆を説得することをあきらめたのだった。

グラスネイクは気を取り直し、聴衆に実務的な事柄の説明を始めた。

「新しい畑や牧場の場所は、もう知っておろう。これをどのように割り振りするのかは、これから検討することになる」

ひとりの男が手を挙げた。グラスネイクはそれを制して、広場に声を響かせた。

「個人的な要望は聞かぬ。すべてが完璧に公平にはいかぬ。だが、おのおのが満足できる配分はできると考えておる！」

男がまた手を挙げて、グラスネイクに負けない大声で言った。

「俺は村長を信頼している。俺が聞きたいのは、この庭園計画がこれからどうなっていくのかということだ！」

グラスネイクは男の顔を睨みつけた。

「伯爵様のお庭づくりの全貌については、大体のことはお聞きしておるのじゃが……。それがあまりのことで、今はうまく説明できぬ」再び、ハンカチで額の汗を拭った。

もどかしさと困惑が入り混じったグラスネイクの声に、村人達はまたざわついた。

こうしてウッドステイク村は、数百メートルほど離れた丘の斜面に移転し、村人達が引き払った村は直ちに取り壊された。

建物だけではなく、道に敷かれた美しい陶板は剥がされ、村人達が丹精込めた庭も破壊された。

残されたものは、老婆イレヌの家と狭い畑、教会、広場の噴泉、村の入口にある水霊の像、井戸、そして木々に囲まれた村外れの墓地だけ。

これ以降、ウィルストロング伯爵の庭園工事は、急ピッチで進むことになった。

多くの人夫によって、広大な範囲の林の位置やボリュームが変更され、丘には微妙な起伏が新たに設けられた。

窪地には、昔からそこにあったかのような池が作られ、縁には水生植物が植え込まれた。

複雑に入り組んだ村人達の畑は牧場として生まれ変わり、家畜が自分勝手なところに行かないように、館からは見えない空堀が設けられた。

視界を遮る森の木々は切り払われ、森と草原の境界線が明確に区画された。

村人達が手入れを怠らなかつた木の栈橋も撤去され、代わりに古風な石造りの船着場が設置された……。

歳月が流れた。

庭園工事は完了し、移植された木々は根付いて成長を始め、草木や野山の草も、何度も花を咲かせ実をつけた。

最後まで残っていた人夫や造園職人が引き上げ、牛や羊が館の近くまで迷って来てしまう事件もなくなり、風景全体としてはなじんだものとなった。

そして、打ち捨てられた、かつてのウツドスティック村は……。

取り壊された建物の基礎や崩された壁は、緑に飲み込まれようとしていた。

そのさまは、まさしくウィルストロングが命名した「遺跡」となりつつあったのである。

第 5 章 「貴族」

日が西に傾きかけ、木々の影が長くなってきた頃、ウィルストロングの甥、プラダー卿が館に到着した。

コティが兄と慕う青年貴族である。

プラダーはわずかな休息をとると、少しも心配していないような顔をしながら、散策がてらのコティ搜索に出かけていった。

そのころ、ウィルストロングは祝賀会の演説の原稿を書いていた。

曰く、

私は、類まれなる才能を持つレッド卿に、白羽の矢を立てたのであります。

将来を約束されている、わが国随一の庭園技師と私は、毎日のように領地を調べて廻りました。

地質や植生や地形、庭園素材となりうる大木や巨岩、美しい水系などをくまなく見て歩きました。

常にここに住んでいる私の目にさえとまらなかったものが、博識に裏打ちされた卿の指摘により、生き生きと目に見えるものとなって眼前に立ち現れたのであります。

あるときは館のバルコニーに立ち、領地を眺め渡し、またあるときは熟慮された協議が何日にもわたって続き、数え切れないほどのスケッチや計画図が示されました。

こうして、大庭園の構成を決定したのであります。

そのプランは、大掛かりな工事の始まりを告げる、晴れがましい

ファンファールのように、私の脳裏に焼きつくものだったのです。

ウィルストロング伯爵。

今をときめく先鋭的進歩派ホイッグ党の貴族。

新しいイデオロギーの急先鋒を自認しているウィルストロングが着手したのが、相続した領地に複雑に入り組んだ入会権の整理と、伯爵家直轄の庭園用地の確保だった。

その庭園とは、「英国式風景庭園」と後の世で呼ばれることになる、イギリスの貴族の間でブームを迎えていた伸びやかでおおらかな自然風景様式の庭園であつた。

立憲君主制国家の政治理念の象徴……。

フランスの絶対君主制国家の圧政に対するアンチテーゼ……。

つまり、新しい政治理念への思い込みが、庭園トレンドの最先端をいくことに重ね合わせられていたのである。

ウィルストロングは、巨大庭園の造営が、あたかも自分の政治思想の、形を伴った唯一の表現であるかのように、血眼になったのである。

原稿は曰く、

館から見える限りの小川や林などを徹底的に作り替え、私の理想とする絵画的自然風景を作り上げることができました。

もちろん、何代にもわたって築きあげられてきた花壇や植え込みを撤去することほど、心を悩ませたことはありません。

しかし、旧弊を打破し、新しい時代の治世を象徴するひとつの景が、これからの庭園にも必要なのです。

すなわち、芝の野原が館の足元からずっと向うの丘陵まで自然の

風景として続いていることが、わが庭園計画の根幹を成すものだとするれば、ちつぽけな花壇の撤去にどれほどの躊躇が許されるでしょう！

私は、この先進的な庭園ランドスケープのために、私とレッド卿が望んでやまない伸びやかな景を実現するためには、歴史ある村を移転させることさえ厭わなかったのであります！

ウツドステイック村はもちろん移転に反対した。

しかしウィルストロングは、他村の人夫をかき集めて移転先の工事を強行させたのである。

有無を言わさなかったのだ。

原稿はさらに曰く、

さて皆さん！

それでは村の跡はどうなったのでしょうか。

これは明日の午後のお楽しみです。

皆さんを、このすばらしい庭園にご案内する用意は、すでに整っております！

原稿をランプなしでは書けなくなったところ、馬のいななきが聞こえた。

ウィルストロングは立ち上がり、窓の外に視線を走らせた。

薄暗がりの中、ブラダーが、コティの乗馬パープルサンダを連れて帰ってきた。

しかし、そこにコティの姿はなかった。

搜索隊が編成された。

伯爵直属の屈強な男達が、小川や池や沼地、榆の林、うつそうとしたアラカシの森、広大な庭園内に設えられた大小いくつかの園亭などに向けて散っていった。

日が落ちた。

全てのものの輪郭があいまいになり、徐々に夜の黒に混じりあっていく。

ウッドステイック村が、ぼつぼつと光をちらつかせ始める。

やがて、館の窓から見えるものは、もはや完全に暗闇に支配された森の漆黒と、わずかに彩度を残した草原や、空の色で構成されるラフなパターン図のように、単調な景へと変化していった。

第 6 章 「老婆」

数日に及んだ祝賀会が果てた。

ウィルストロングが友人を見送って、館の前で佇んでいる。細かい雨が音もたてずに降っていた。

「コティ姫もそのうち、ひょこり帰ってくるさ。気落ちするな」

「いや、そう見えるとしたら、君に楽しんでもらえなかったことを悔いているからだ」

「私は十分に楽しませてもらった。感謝している」

「そう言ってもらえるとうれしい。もう少し滞在を伸ばすわけにはいかないのか。君と庭園を見て廻ることを、私がどれほど楽しみにしていたか。実は、庭の中におもしろいものを用意していたのだ。君にはぜひそれを見て欲しかった」

「気持ちはうれしいが、姫の搜索の方が大切だろう。姿が見えなくなつてまだ一週間。きっと大丈夫。ご自慢の庭の探索は、次回の楽しみにしておくよ」

ウィルストロングの肩に軽く手を乗せ、握手を求めた。

「では、これにて失礼する。今後、今まで以上の君の活躍を、心から期待している」

馬車が動き出す。

柔らかくなつた土にわだちを残し、サンザシの緑廊に消えていく。そして、あたりはすっかり静まりかえる。

青みがかつた大気。平面的な書割となつた森の緑。

その輪郭を、ウィルストロング伯爵の目がなぞるようにさまよつた。

連日、村人達も動員した大規模な搜索が行われたが、手がかりは

なかった。

あの日、館を出た後、コティを見かけた者がいなかったのである。若い少女と、ひとりの男を除いて。

村人達が普段の仕事に戻ることを許された夜、庭師ファインコルトが村のパブの扉を開くと、常連の男達が座っていた。

「フン、やっと無罪放免か。えらく振り回されたもんだ」

「まあそう言っな」と、ファインコルトはカウンターに肘をつく。

パブといっても、村唯一のよろず屋で、店の主人であるオルカバ自慢の自家製エールを目当てに、友人達がたむろしているだけのことだ。

店の一角に、数人が肘を寄せられる短いカウンターが設えられてあった。

オルカバが細い腕を伸ばして棚からカップを出し、樽の栓を捻って薄茶色の液体を注ぐ。

コティ失踪の話題はその一言で終わり、男達は老婆のことを話し始めた。

「誰か、イレー又婆さんを知らないか？ 家にいないようなんだ」と、郵便配達夫コトンフィールドが、やせた肩をすくめたのだった。

「婆さん宛てに、手紙が来たんだ。珍しいこともあるもんだろ。何だと思う？ 暇な貴族がやってる、なんとか養老福祉基金とかいうところからだ。その封書を配達しに、久しぶりに婆さんの家まで行ったんだ」

「家はどんな様子だったのか？」

「あれ？ お屋敷の調理場で働いているあんたが一番よく知ってる
と思ったんだがな」

横目でクイックバードという調理人を睨む。

「ふん。で、どうだったのだ」

「ちゃんと掃除はされているようだけど、いやにがらんとして……」

「それで？」

「封書をテーブルに置いて帰ってきた。いつまでも、あんな陰気な
ところで待っていてられないからな」

「フン」

「とはいうものの、気になって、お嬢探しの時に、ついで見に行
ってきたんだ」

「で？」

「封書がそのままなんだ。開封されていない。それだけではなくて、
うまく言えないけど、部屋中のもの全てが、そのままのような気が
したんだ」

調理人クイックバードが、館の同僚であるファインコルトにコッ
プを掲げてみせる。

「コルト、おまえ、たまには婆さんに会っているんじゃないのか」

ファインコルトは眉を寄せ、首をゆっくり横に振る。

店の主人、オルカバが話に加わった。

「それにしても……」

主人自身も、もちろんエールを口にしていた。

「婆さんには冷たいことをしたよなあ」

誰もたいした反応を示さなかったが、気持ちは同じだった。

「ここに引越すときに、無理にでも引張って来るべきだったんだ。婆さんに同情する者は大勢いたが、力づくでも連れてこようとする者はいなかった」

「うむ」

「婆さんが来てもらわにゃと、なんとか説得しようとしていたグラスネイクも、最後にはあきらめてしまった」

「村長も辛かったろうさ」

「まあな。頑固だからなあ、あの婆さん。で、とうとうグラスネイクは伯爵に申し入れた。覚えているだろ？」

「ああ」

「例外的に、婆さんを、このまま自分の家で住まわせて余生を送らせたいと頼むのは、村長であるグラスネイクにとっては辛い役回りだったろう」

「ファインコルトもクイックバードもコトンフィールドも、飲み屋の主人オルカバの言葉に、一様に頷いた。」

「伯爵から許可は下りたが、村を仕切る村長としての統率力がほころんだように感じたろうし、伯爵に借りができたようにも感じたことだろう。あの夜、グラスネイクはお屋敷からここに直行してきた。厳しい寂しげな顔をして……」

クイックバードが相槌を打ち、話を引き取った。

「そのときはまだ、わしらは知らなかった。伯爵様がわしらを村に近づかせないようにしようと考えているとは、思ってもみなかった。わしらは交替で婆さんの顔を見に行き、万が一のときは、身の回りの世話をすればいいと考えていた……」

「何しろ、あれだけのことをやってのけた庭園だからな。村人が思い出たつぷりに歩き回るのは氣にくわないんだろうさ」

オルカバが吐き捨てるようにいった。

「コルト、婆さんの家を明日にでも覗いてきてくれないか」

「いつから婆さんは、いなくなったのじゃ！」

「そんなこと、知らないよ。俺が言ってるのは、配達したときのままだということだぜ」

広場に面した村長グラスネイクの家の窓から、教会のシルエットが夕焼けに浮かび上がっている。男達が集まっていた。

「おまえ達も知らないのか？」

噛み付くグラスネイクに、ファインコルトとクイックバードが頷く。

「ああ。今朝、見にいつてみたんだが……」

「婆さんは、我々と同じ村の人間じゃぞ。ところが、おまえ達ときたら、それを酒の肴にしていただけか！」

「村長、それは言いすぎだぜ。俺が言い出さなきゃ、あんただって婆さんのことなんか、気にも留めなかっただろ」

「何を言うか！ わしには婆さんのことで、計画していることがあるのじゃ！」

「まあまあ。言い争っていても始まりませんよ」

牧師のスチムが提案する。

「どうか。もう日が暮れる。明日の朝、手の空いている者だけでも、探しに行くというのはどうですか」

「そうじゃな」

村長は両手で顔を擦り、考えをまとめようとしていた。

「では、明朝六時から始めよう。集合場所は広場じゃ。すまんがスチム、これからわしと一緒に、伯爵様のところへ付き合ってくれ。ファインコルトもお屋敷へ帰るんじやろ。一緒に行こう。オルカバらは手分けして、村の主だった者に知らせて廻って欲しい」

こうして、村の男達は動き出した。

第 7 章 「夜道」

三人は館への近道をとった。

本道ではなく、かつての村の近くを通る細い道。

「ところでファインコルト、婆さんのところへは全く顔を出していないのか」

「遺跡には近づくなと言われてるんでな」

「遺跡？」

村の跡、と応えながら、ファインコルトは自分がいつの間にか、遺跡と呼ぶことに抵抗がなくなってしまうことに気がついた。

「うーむ。婆さんにはいつ頃、会ったきりなんじゃ？」

「もう二年くらい前か」

「そんなに前のことか！」と、グラスネイクが吼えた。

「婆さんはどんな様子じゃった？」

「相変わらずつつけんどんで、おまえ達、このままでいいと思ってるのかとか、村の衆に災いが必要ばいいがとか、娘がどうのこのとか……。まあ、元気そうだったが」

「そうか……。わしが会いに行つたときは、追い返されたも同然じやった。わしは恨まれておるんじやろう」

ゆるい登り道が続き、蒸し暑い。ファインコルトは野良着の胸をはだけて、夜の空気を入れる。

「婆さんは変わってしまったていた……。いや、変わったのは見かけだけで、中身は変わってはいない。中身の方は、むしろ俺達の方が変わってしまったんだろう……」

自分の口から出た言葉に、力を奪われたようにファインコルトは肩を落とした。

三叉路にさしかかる。見覚えのある大きな榆の木。

右手に進めば、懐かしい村の中心部に至るが、荒れた踏み跡程度しか残っていない。

木々の間に見えるものは、瓦礫となり、ツタに覆われた建物の残骸と、モナエドの木像だけ。女神の姿をした水霊の像は、雑草に囲まれて、腰から下が見えなくなっていた。

三人は村の跡地を迂回する道をとっていく。

「どうしたスチム」と、グラスネイクが声を掛けた。

若い牧師は立ち止まり、硬い姿勢でせせらぎを見つめていた。

「昔はこんなところに小川はなかった。あれから、いろんなことが変わってしまった」

長さ三メートル足らずの柱状の石が二本、せせらぎに架け渡されていた。

「これは……、これは教会の地下室の石です」と、牧師はしゃがみこんで、石の橋に触れた。

「ほう。地下の扉を封印していた石じゃな」

「ええ……」

「ん？ 待てよ。数年前、ここには確か、木の橋が作られたように思うぞ。もっと幅のある……。そうか、広い道が向うに作られたときに、この石で架け替えられたんじゃな」

スチムがまだ石を撫でている。

「そうじゃったな」

と、グラスネイクが同意を求めたが、ファインコルトはきびすを返して歩き出した。

「さあ、遅くならないうちに行こう」

十日ほど前、ファインコルトがマリーと出会ったキイチゴの群落の横を通り過ぎて行く。

男たちを追いかけるように、ミズキの花が匂っていた。

館の裏庭に、古びた木造のパーゴラがある。

庭園大改造で難を逃れた、数少ない構築物のひとつだ。かつて、この周りには、各地のプランツハンターから手に入れたさまざまな珍しい花が植えられ、華やかな庭園の見所のひとつだった。

しかし今は、ノイバラのような小さな花をつけるバラが、かん木に埋もれるように生存を許されているだけ。

ファインコルトは手すりに腰を下ろし、その香りをゆっくりと吸い込んだ。

と、白い人影が近づいてきた。

薄い綿のブラウスと素朴なギャザースカートを付けた若い貴婦人。ファインコルトは立ち上がり、腰を曲げた。

「まあ、ファインコルト。こんなところで何をしているの？」

「はい、人を待っているのです。ガリー様こそ、今時分にお散歩ですか？」

「ええ、バラの香りが好きなの。夜は特に匂うようよ。でも、あなたはだれを待っているのです？」

「グラスネイク村長とスチム牧師です。明日から搜索を始めることをお伝えしに来ました」

「コティお姉様の？ 皆さん、どうもありがとうございます」

「あ、いえ、明日は村の呪術師イレーヌの搜索です」

ファインコルトはガリーに問われるままに、イレーヌ失踪の件を話した。

「そのお婆さまというのは、遺跡に住んでいた方ね」

「はい」

「お元氣になされているのかしら。そういえば姉も、このごろは何も言わなくなっただわ……」

ガリーは顔を曇らせたが、ころりと表情を変える。

「ねえ、ファインコルト。先日、お父様と遺跡へ行ったとき、地下洞窟に入ったのよ。ワクワクする冒険だったわ」

そこに、グラスネイクとスチムが戻って来た。

「ガリー様。いつか、あの遺跡のことについて、お話ししてさしあげましょう」

ガリーは微笑んで頷くと、ふたりに軽く会釈して館に戻っていった。

「了解をもらったか？」

「グッチホルドは、伯爵様が留守にしていたよかったな、と言いつた」

「ふん」

「あいつめ、婆さんの最近の様子や、誰が世話をしているのか、言えないの一点張りじゃ」

第 8 章 「草原」

同じ頃、パブではクイックバード、オルカバにその妻ビオラシードが加わって噂話に花を咲かせていた。

館の女中をしているビオラシードがイレエヌの世話係だった掃除婦のメグについて話していた。

「あの娘が辞めさせられるちょっと前のことだよ。いつものように食事を持って行ったんだって。メグが行く時間には、婆様はちゃんとお茶を用意して待っていたそうだよ。なのに、その日にかぎって婆様の姿が見えない。畑の辺りを探しても見つからない。メグは村の中をうろついているうちに思いついたんだ。婆様が以前話してくれたことのある井戸にいるんじゃないかって。それでメグは、井戸がある広い草むらに入っていった。その中にあると聞いていたんだね。踏み跡を見つけて、ずんずん進んでいった。すると、コティお嬢様の姿が見えたんだって」

ビオラシードの声は噂話らしい声色になり、いかにも自分が見ていたような口振りになる。

「普段、メグはコティお嬢様には近づかない。でも、そのときは婆様のことがあるから、恐る恐る近づいていった。すると、草に隠れて見えなかったんだね。コティお嬢様は、ぽんと開けた空地に立っていた。そして、そこには井戸があり、今まさに婆様が水を汲み上げようとしていた。メグは婆様に駈け寄ろうとした。手伝うためにね。それをお嬢様が黙って鞭を上げて遮ったんだ」

コティはメグには見向きもせず、イレエヌを見つめていた。
イレエヌは地味な茶色の古ぼけた服を着ていた。紐できつく絞っ

たギヤザーの襟ぐりから、細い首が突き出している。

力を入れるたびに、首の血管が浮き出る。小さな体にアンバランスにのっかっている伸び放題の白い髪。血の気の失せた浅黒い顔。刻まれた深い皺。

色の薄い瞳からは、どんな感情も読み取ることができない。

黒い雲が強い風に流されていく。

イレエヌの髪が乱れて顔を隠した。

イレエヌは辛そうにロープを手繰り上げ、水の入った重い桶をつかむ。

力のない痩せこけた腕。くるぶしをあらわにした足。いつもの革のサンダルを履いていない。素足だった。

よろける。桶から水がこぼれ落ちる。それでも、足元に置いた水入れの中に井戸の水を移し替える。

それはわずかな量だった。

唐突に、コティが居丈高な声を浴びせかけた。

「おまえ、今の格好が一番いい！ ここの風景に似合っているわ！」
イレエヌは何も言わず、桶を井戸の縁の上に置いた。

「雨の中もおまえを見てみたい。イレエヌ、いいこと。明日も同じ時間にここに来るのよ！」

老婆は黙ったまま、草むらの中に入っていった。

曲がった背よりはるかに高い草に隠れて、すぐに姿は見えなくなった。

コティが井戸の周りを一回りして中を覗き込んだ。メグなどそこにはいないかのように一瞥もくれない。そして馬にまたがった。

メグの顔は怒りで火照り、引きつっていた。

しかし、前を通りすぎていくコティに顔色を悟られないように、黙って頭を下げ続けていることしかできなかった。

「メグはこの話を、その日のうちに私にしてくれたのさ。涙ぐんでいたよ。やさしい娘だったのさ。お屋敷を辞めたのは、いや追い出されたというべきだね、それからすぐのことだよ。理由は聞かされなかったけどね。この話を知っているのは、お屋敷の中でも多くはないよ。きっと、私とフアインコルトさんだけだろうね」

第 9 章 「小屋」

翌朝、コテイの搜索に狩り出された直後にもかかわらず、数十人の村人が広場に集まってきた。

グラスネイクは気を良くし、てきぱきと指示を出す。グラスネイク、ファインコルトとロン、スチム、オルカバの四人は主管部隊としてイレエヌの家を本部とし、かつ周辺の搜索にあたることになった。

コトンフィールドが話していたとおり、イレエヌの家の家具調度品や日用品類はきちんと整頓されていた。

主室の中央には古ぼけた椅子とテーブルが置かれてある。ベッドには皺のないシート。かまどには燃えさしの薪。棚には整然と並べられたわずかな調理器具や食器。部屋の間には麻袋や大小の壺。そして数冊の本と束ねた書類を納めてある小さな書棚や鍵のかかった衣装箱。

それらのものが主の帰りを待っていた。

グラスネイクは垂れ下がった厚いカーテンから顔を突き出し、狭い面談室を覗く。

二メートル四方の窓のない部屋。天井は低い。

漆喰の壁一面に、青い顔料で描き込まれた細かい不思議な模様。四周の壁に取り付けられた棚の上には、桶や木箱やさまざまな金属製品などが並べられてある。

術を頼みに来た客が座るカシの木の椅子と、イレエヌが腰掛けていた柳の枝で編んだ椅子が、昔と変わらず向き合っている。

「あたりを探してくる」

オルカバとスチムが出ていった。

「俺もちよっくら廻ってくるか。ロンは村長のお守りだ」

出て行くファインコルトを見送って、グラスネイクは帽子をテーブルに放り出した。

椅子にゆっくりと腰掛けると、部屋の中を眺めはじめる。グラスネイクは村の移転を決めたことに後悔はない。ウィルストロングの横暴に対して、心に込み上げてくるものがあつたとしても、村の今の状況におおむね満足しているのだ。

課題があるとすれば、ウツドスティック村としてのアイデンティティが薄れつつあるという漠然とした不安だけだった。

グラスネイクは村長として計画を練り始めていた。

失われた伝統行事を復活させ、変質した儀式はその意義を改め、これら全てを収める村の物語を組み立て直すという計画だ。

中心となる行事はすでに決めてある。水霊モナエドの加護により、自ら幸福を手に入れるための儀式「タウザポツ」。

新しい命が誕生したとき、成人したとき、イレエヌが手向ける水霊の水に足を浸けて祝福されるというものだった。婚姻のときには清き水を掛けあい、喜びを分かちあふ。

かつては盛んに行われていたこの行事を復活させることによって、ウツドスティック村の住人であることの自覚を、ひいては団結を、なにより互いの愛を再び醸成できる。

そう考え始めていたグラスネイクは、そろそろイレエヌと相談したいと思っていたのだった。

その儀式のために必要なもの。精霊の水差し。

以前、この部屋の天井近くに設えられた棚には、大きな銀の水差

しがいつも飾られていた。井戸からその水差しを引き上げるためのロープも。いずれもウツドスティックの村人なら何度も目にし、触れたことのある品物だった。

ロンが窓のカーテンをたくし上げ、退屈そうに外を眺めている。グラスネイクはロンを誘って裏庭に出た。

イレエヌの畑には雑草が生い茂り、畝も崩れようとしていた。人の気配に驚いて、小さな動物が逃げ出した。農具入れの小屋があるが、すでに大方崩れ落ち、中には雑草がなに憚ることなく茂っていた。

ファインコルトが、ひとつの小屋の前で立ち尽くしていた。グラスネイクは足を止め、顔を心もち上げ、息を吸い込む。

懐かしい匂い。バラの香り。

「ウイズパーラ」と名付けられたバラ。パーラ、ファインコルトの妻。

昔、ある農夫が、ひときわ甘く、それでいてさわやかな草いきれの混じったような香りのバラを作り出し、自分の娘にちなんでつけた名前。

やがて村は、このバラの香りに包まれた。まだ幼い伯爵の娘コティが、このバラの匂いには品がないと言い放ったあの日までは……。

そのバラが、誰かが植えたかのように、小屋の残骸の中央に立って、赤い花を咲かせていた。

「もう一本も残っていないと思っていた」

グラスネイクは声を掛けて、振り返ったファインコルトにあいまいな笑顔を見せた。

ファインコルトは、表情を変えずに息子を手招きすると、バラの

香りを嗅ぐように促した。

「お母さんのバラだよ」

父の視線を受けて、ぎこちなくバラに顔を近づけるロン。

「おお、この小屋は……」

グラスネイクはつぶやいた。

この小屋は、かつて、祝福を受ける村人がイレエヌにあの芳しい水を振りかけてもらうまで控えている場所だった。

第 10 章 「巫女」

「あの日以来、初めてです。ここに來たのは」

スチムが教会の扉の残骸を撫でる。

ステンドグラスがはめ込まれていた丸窓や、廃墟らしく見せるために叩き壊された屋根板の隙間から朝日が差し込んでいる。

「あんたが昨夜見た石は、もともとはどこにあったんだい？」

こちらです、とスチムが建物から出ていく。

「地下室には入ったことがない。中はどうなっていたんだ？」

「私も途中までしか入ったことはありません。何もない広間があった、その奥の扉を開けると、さらに下に降りていく細い通路がありました。その先まで行くことが許されるのは、イレーヌ婆様だけでした」

「そんな話だったかな」

「庭園工事が始まって、扉を封印していた石は井戸に蓋をするために持っていかれました。モナエド様の井戸のために使われるのなら、と半ば安心したものです」

建物を回りこんで裏手に出る。

と、これは、とふたりは顔を見合わせた。

かつて地下室の入口に降りる階段があったところは、地面が大きくえぐり取られ、すり鉢状の斜面になっていた。

すでに、シダやかん木がうつそうと茂っている。

一筋、草が刈り取られ、数日前に人が上り下りした形跡があった。

「降りてみるか……」

「いえ、教会の地下には入ってはいけないことになっていますから」

「そうか……。もう廃墟だぜ……。この踏み跡は婆さんじゃないか？ 覗かないわけにはいかないだろ」
オルカバが斜面を降り始める。

斜面は緑に包まれ、上で待つスチムはすぐに見えなくなった。蔓に足元を取られる。ぬかるみを慎重にやり過ぐすと、教会の赤い石の外壁が現れ、突き崩されたような穴が穿たれていた。地下室の石の床には、入口に近いところから徐々に草や蔓が侵入し始めている。

しばらく目を闇に慣らしていると、テーブルが設えられてあり、ランタンと火きりが置かれてあるのが見えてきた。

イレーヌの小屋では、グラスネイクがロンに椅子を押さえさせて面談室の棚の上を覗いていた。

毒づきながら手についたほこりを払う。

「村長さん、何を探しておられるんですか？」

「水差しじゃよ」

それなら、とロンが指差したものを見て、グラスネイクは首を振る。

そして、「そうか、おまえは知らんのじゃな」と、微笑みかける。
「イレーヌ婆さんの水差しといったら、ザ・ポットと言ってな、もっと大きなものじゃよ。最後にあれを使ったのは、いつじゃったかな。もしかすると、おまえが生まれた時に使ったのが最後だったのかもしれないぞ」

フラインコルトが首を横に振った。

「ん？ そうか、おまえが生まれたのは、もう村が引越してしまっただけからか……」

グラスネイクは主室に戻り、かまどのあたりを調べ始める。
まさか、こんなところに、と言いながら水がめの蓋も取ってみた。

「おかしいのう」

その様子を見ていたロンが、そうだ、と声をあげた。

「もつと大きな水差しなら、ぼく、見たことがありますよ」

「そうか！ どこじゃ？」

「お墓です」

「なに？ お墓？」

ロンは、パーティの二日前、地下洞窟で水差しを見たことを話した。

「なるほど。お墓というのは、この先の大きな建物の下のことじゃな？」

グラスネイクの唇から、思わず大きな溜め息がこぼれ出た。

「ロンよ、それはわしらの村の教会じゃよ。そしてその湧き水こそが水霊モナエドの泉なんじゃ」

グラスネイクは厳しい目をファインコルトに向けた。

「では、行ってみよう。しかし、どうしてお墓だと思ったんじゃ？」

「骨です。骸骨があつたんです」

「骸骨？ モナエド様の泉に？」

ロンが強く頷く。

グラスネイクはファインコルトと顔を見合わせた。

「その骨は古いものか？ どんな感じじゃったかな。つまりその、

女か男かとか、持ち物とか、背丈とか」

「えーと、村長さん……。あの、もしかして、イレーヌおばあさんだったか、ということですか？」

グラスネイクは口元を引き締めた。

ロンはこぶしを握りしめた。

「ごめんなさい。イレ－ヌおばあさんのことは、あまり思い出せません」

「服は？」

「えーと、服は着ていました。腐りかけていて……。青っぱい……。そうだ、木のブローチ！ 葉っぱの模様の大きなブローチをしていました！」

グラスネイクはがつくりと腰を落とした。

「そうか……。あそこで……。もう骨になっていたのか。なんということじゃ……」

第 11 章 「儀式」

グラスネイクとファインコルト親子がオルカバとスチムに出会ったのは、瓦礫が散らばるばかりとなった昔のパブの跡だった。

「残念じゃが、今オルカバが見てきた骨が、婆さんに間違いなからう。手分けして村の者に知らせてくれ。一旦、村に帰る。婆さんの遺体をどうするかは、村に帰ってから相談しよう。いずれにしろ、早急に婆さんを運び出してしまわねばならぬ」

「気になることがあるんだが」
オルカバが呼び止めた。

「何じゃ？」

歩きかけていたグラスネイクは、振り返りもせず厳しい声を出した。

「ことは急ぐぞ。村に帰ろう。夕方には伯爵様がお帰りになる」

「ザ・ポットにロープが結わえられているんだ」

グラスネイクの足が止まった。

「それは……、なんと、タウザポツじゃ！」

「ええ」と、スチムも頷く。

「イレ－又婆様は昔ながらの所作をしようとしたのですね。ひとりでロープを伸ばして」

頷きあっている大人たちを見て、ロンが父親に聞いた。

「ねえ、タウザポツって、どういうこと？」

「こういうことだよ。昔は、村のいろいろな儀式や行事で水霊モナエドの水、つまり教会の地下にある泉から湧き出る水が使われてき

たんだ。そして、その水を汲むのが村の巫女であるイレエ又婆さんの役目」

ファインコルトはタウザポットの所作の手順を、ロンに話して聞かせた。

「水霊の泉には入ったことがないから、よくは知らないけどね。まず、婆さんが地下の祭壇で、流れ出す伏流水に百メートルほどもある長いロープを委ねる。地下の水脈でつながった広場の水霊の井戸には、村人達が待機する。ロープは地下の水脈を流れていき、先端が井戸に達したときに、村人が引き上げる。地下には水の通り道、洞穴のような水路が続いているんだね。次に、婆さんはロープで結ばれたザ・ポットを水に沈める。井戸にいる大勢の村人達がロープを引き、水差しを伏流水にくぐらせながら、水を汲み上げるんだ。不思議なことに、ザ・ポットはどこにも引つかからずに井戸まで流れてくるんだよ」

「ふーん。でも、井戸から汲み上げるんですよ。そんなことをすれば、汲み上げた水は泉の水じゃなくなってしまふよ」

「うん、まあな」

オルカバが瓦礫の中をうろついている。思い出の品、あるいは記憶の断片を探すように。

ファインコルトがその様子を眼で追った。

グラスネイクはオルカバが何かを言い出すのを待ちながら、「まあ、ではいかなぞ」と、ファインコルトに代わってロンに教え始めた。

「ロンよ。そのとおりじゃ。しかし、それでよい。つまりじゃ、泉の水だけでなく網の目のように張り巡らされた地下の水脈が、むしろ村人にとって大切なもののじゃ。わかるかな？ 水そのものも大切じゃが、清らかな水をいつもふんだんに使うことができる環境

も大切だ、ということじゃ。この大いなる水脈があるおかげで、村は豊かなんじゃよ。わしら村人は、はるか昔から、そのことに感謝し、ことあるごとに水霊モナエド様の水といって大切に扱ってきたのじゃ」

オルカバが、タウザポツ講座が終わるのを待ちかねていたかのように、口を開いた。

「しかし、おかしいんだ。ロープは何かに結びつけてあるみたいに、引つ張つてもびくともしない。タウザポツのロープはどこかに結びつけるものじゃない。伏流水に流すものだ……」

「ふむ。それに何か意味があるのか？」

グラスネイクが、また歩き回り始めたオルカバに質す。

「うーむ、あの婆さんことだ。きっと、完璧に昔どおりの方法でするはずじゃないのかな」

「そうじゃるな。オルカバの言うとおりじゃ」

しかし、グラスネイクはイレーヌの埋葬をどうするかが気になり始めた。

骨を一旦、村に持ち帰るか、あるいはそのまま墓地に埋葬するか、とひとりごとをいった。早く済ましてしまわなければ、ウィルストロングが何を言い出すか分かったものではない、とグラスネイクは思っのだった。

「急ごうぞ」

「いや、待つてくれ。どこか、変だ」

「しかし、伯爵様が婆様の骨を見ていたのなら、ことは急を要する。今日のうちに我ら村人の手で葬らねば」

ここで、「あのう……」と、ロンが口を開いた。
集まった大人たちの視線に戸惑いながらも、ロンは自分が見たことをはっきりと報告した。

「あの日、旦那様とガリー様がそのロープを引つ張られました。旦那様はお客様達にお見せするアトラクションが増えたとおっしゃって、お喜びでした」

「お喜びねえ、とファインコルトが吐き捨てるようにつぶやいて、パブの外壁の残骸に腰を下ろした。
「それでどうなったんだい？」

オルカバの問いかけに、ロンは首を横に振った。

「ロープはびくとも動かなくて。それで三人で反動をつけて引つ張りましたが、少し手繰り寄せることができただけで」

「うーむ、なるほどねえ」

オルカバが、子供の握りこぶし大の石を拾い上げた。

「イレー又婆様はモナエドの水を汲むということではなく、泉にウザポツの儀式の形を再現し、自分の死に場所としたのでは？ 水霊の巫女としての勤めを全うしたい、と。どうでしょう」

スチムがしみじみと言う。

「そういうことだよ」

オルカバは、拾った二つの石を左手でもてあそび、カチカチと音をさせた。

そして、ふっと目を上げると、ファインコルトに問いかけた。

「もう、井戸の水は完全に涸れているのか？」

「いや、わずかだが流れている……」

ファインコルトが言いよんだ。

オルカバが、もうひとつ石を拾い上げた。

第 12 章 「廃墟」

「わずかか……。だとすれば、儀式の形を再現するといっても、婆さんは困ったわけだな」

「地下の水霊の泉では、水の量はとうだったのじゃ？」

グラスネイクは男達を促すように歩き始めながら言った。

「昔どおりかどうかは知らないけど、相当の量だったよ」

「じゃ、何を考え込んでいるのじゃ。早く村へ帰って準備を」
しかしオルカバは動こうとしない。

「わずかな水では広場の水霊の井戸まで、ロープは流れてこない。
井戸からロープを出すにはどうしたらいいか……」

「そんなことは、今考えなくてもいいことじゃろう」

「いいや。婆さんが死んだ理由を、村人みんなにきちんと話してやらなければならないんじゃないか？ それに……」

「フウ！」

グラスネイクが派手な溜め息をついた。

オルカバが、にっと笑う。

「だろ？ ところでファインコルト、伏流水は教会と井戸との間でどうなっているんだ？」

オルカバの手の平を転がる小石を見つめていたファインコルトも、小さく溜め息をついた。

「教えてやろう。牧師さん、いいか？」

と、スチムに同意を求めた。

牧師は、どうぞ、というように手を広げてみせる。

「水霊の井戸の水量を覚えているだろ。湧き出るといふより、ゴウゴウと渦巻くくらいの量だった。そしてここ数年の間に、その水が徐々に涸れた。水が引いた後には、横穴があいていたんだよ。井戸の底に横っ腹にふたつ、小さな人ならかるうじて通れるくらいの穴が。水はその穴から井戸に流れ込み、そして流れ出していたんだ」

「うーむ、横穴が……」

グラスネイクが唸った。

フラインコルトは、ゆっくりと話していく。

「つまり、伏流水のど真ん中に井戸を掘ってあったわけだ。俺は最近になってそれを発見した。教会の地下室の石が、井戸から、橋のために運ばれてから。すまん、スチム。それをあんたには言いにくくてな」

スチムがにこりと笑う。

「フラインコルト、それで、その横穴のひとつが、教会の下につながっているんだな？」

と、オルカバが石を両手でひとつずつ持って握りしめる。

「きつとそうだろう。伏流水は、教会と井戸の間の地下のどこかでその流れる向きを変えたが、残されたその横穴を通っていったら、今も伏流水が流れているところまで行けるんだろ」

「つまりはこういうことだよな。婆さんは、それを知っていた。なにしろ水霊の巫女だから。婆さんは泉でロープを流してから井戸に行き、横穴に入る。穴の中のどこかで伏流水に流されてきたロープを持って横穴を戻り、井戸から出る。そうすれば一応、形の上では昔のやり方通りになる。ロープは井戸のところで何かに結びつけておく。そうしないと、流れの強い伏流水でいつかは別のところに持っていられるかもしれないから」

オルカバが言葉を切り、ファインコルトを見つめた。

「な、あんた、隠していることがあるんじゃないか？」

グラスネイクはこの成り行きに驚いていた。スチムも驚いたようにオルカバを見つめている。

ロンの肩を抱き、ずっと視線をそらしたファインコルトに、オルカバが問いかけた。

「コティ姫がいなくなった日の朝、ちょうど同じ時刻、ファインコルト、ここに来ていたんじゃないか？」

「……」

ロンが驚いたように父親の顔を見上げる。

「横穴に気がついたというのは、そのときのことじゃないか？ あ
のとき、やけに急いでいたそうじゃないか。あつ、礼を言うのを忘れていた。マリーの傷の手当てをありがとう」

「やれやれ」

ファインコルトはゆっくり立ち上がり、ロンの頭を撫でると、

「さあ、井戸まで行こうか」

と、にやりとした。

「おまえ達、どういうことなんじゃ？」

グラスネイクがファインコルトとオルカバをかわるがわるに見たが、ファインコルトはもう歩き始めていた。

オルカバは小石を鳴らすのを止め、ひとつを足元に落とし、ひとつはポケットに入れた。

「行こう。伯爵様も、さぞやお喜びになるだろうよ」

第 13 章 「薔薇」

身の丈以上ある草むらに、真四角にカットされた敷石が残されている。広場の中央には直径二メートル余りの比較的大きな井戸。モルタルで固められた錆色の丸石の縁取りが清潔な印象を与えている。脇に、目印のようにモミの木が立っている。最近植えられたものようだ。

幹にはロープが結わえられ、ぴんと張った先が井戸の中に伸びていた。

井戸の深さは八メートルほど。

暗い底にごろごろと積み上がった人頭大の石は乾いていた。隅のほうに、落ち葉の浮いた小さな水溜りがあるだけだ。

底から少し上の側壁に、人が屈めば入って行けるほどの横穴がぽっかりと口を開けていた。

そこからわずかな水が流れ出している。モミの木に結わえられたロープはその横穴の中に伸びていた。

ごろごろ石に飛び散ったコティの血は、もうすでに黒く乾いていた。

そして、かつて村人達が精霊の井戸といって大切にしてきた竪穴の中には、コティの死体から立ち上る腐臭が満ちていた。

「やはり伯爵様には、お話しせねばなるまい。しかし、どうお話しすればよいのか。よく考えぬと……」

グラスネイクが思案している。

イレ－又の遺体は、村の広場で簡単な式を行なってから、昔の村の外れにある墓地に埋葬した。

本人の意向は、水霊の泉の脇で、水差しにくくりつけたロープを伏流水に流したまま眠ることだったのだろう。

とはいえ、あのままウィルストロング伯爵の見世物になることは本人の意思ではなかったはずだ。

「どうお話しするって？ フウ！ じゃ、説明するよ」

オルカバが、拾ってきた石をもてあそびながら話し始める。

「伯爵が不謹慎にも、祝賀会のアトラクションとして、婆さんの白骨を客に見せようとした。クソたれ庭園の飾り付けのひとつとしてな。婆さんの家もそうだよ。庭園の見世物としていつも掃除はされていた。伯爵は婆さんの白骨を、いつか、あそこで見つけたんだな。もしかすると彼自身が、ということはもう考えないでおこう。もし彼が婆さんを殺したのなら、残されていたタウザポツの仕掛けの意味がうまく説明できないからな。で、伯爵は祝賀会を前にして、泉と白骨の様子を確認に行った。ロンの話では、そのとき彼はザ・ポツトを見つけ、ガリー様と一緒にロープを強く引いてみたんだ。でも、水流は重い。そこで、反動をつけて、グツとね。コティの方の話はファインコルトがするかい？」

「いや結構。やってくれ」

同じ頃、村の跡を清掃しながら歩いていたファインコルトは、コティがひとり、馬に乗って走ってくるのを見た。

むろん、係わり合いにはなりたくない。草むらに隠れてやり過ごそうとした。ところがコティも草むらに入ってくる。

婆さんの姿が見えないことが気になっていったファインコルトは、まさかと思い、こっそり後をつけた。そして、とんでもないものを

見てしまったんだ。

ファインコルトが、げんなりしたというように渋面をつくる。

ファインコルトがパープルサンダを驚かせないように草むらから覗くと、ちょうどコティがロープを持って井戸の中に降りようとしているところだった。

コティが井戸の縁に足をかけた。そのときだ。ロープがいきなりぴんと張ったのは。

あっという間に、コティはバランスを崩して、頭から井戸の中に転落してしまった。

きっとファインコルトはあわてたろうし、血の気が引いただろうよ。

が、とにかく、井戸に走りよった。しかし、コティはすでに動かなくなっていた。

「で、降りてみたのかい？」

「まあな」

「まだ息はあったのか？」

「おい！」

「フフ。そうさ。すでに死んでいたらうさ。頭からあの高さを落ちたんだからな」

オルカバがニヤリと笑う。

コティが死んでいることを確かめると、ファインコルトは馬の手綱を解き、急いでお屋敷に戻った。

今の出来事は誰にも見られていない。もちろんファインコルトは知らん顔を決め込むことにした。

オルカバは、うまそうにエールを一口飲んで、喉を濡らす。

なぜあの日、コティが井戸に行ったのかはわからない。井戸の横穴に入ったことがあるのかもしれない。祝賀会に来る誰かに横穴を見せようと、確認に行ったんじゃないかな。どうでもいいことだ。

グラスネイクは、オルカバの話を聞くとまなしに聞いていた。

いいかな。この想像をたくましくした話を、伯爵にするのは村長の役目だ。

コティお嬢様を、井戸の中に引き落としたのは、伯爵、あなたです、って。よろず屋の親父が、へらへら言うのと、村長が肅然と言うのでは、信憑性が違う。

ただし、ファインコルトが一部始終を見ていた件はオフレコだぞ。

オルカバが拾ってきた石を、ボトル棚の下の段にそっと置いた。

「ワハハッ、冗談だ！ たまたまコティを見つけたことだけを報告すればいいのさ。な、村長！」

グラスネイクがハッとして目を上げた。

「ばか者！ 当たり前じゃ！ わしが悩んでいるのはそんなくだらんことではないわ！ 明日の朝、伯爵様にお話するのは、新しい立派な水霊モナエドの井戸を掘らせていただくということじゃ！ モナエド様の祭りを再開するためにな！」

そう言ってから、フツツと笑った。

イレー又は死んでいた。

コティも死んでいた。

しかし井戸を復活させるという申し出はきつと認められるだろう。そしてたった今、思いついたことが、いいアイデアのように思えて、自然に笑みがこぼれてきたのだった。

グラスネイクはファインコルトに向き直った。

「あのバラの香りでこの村をまた包んでくれんか。それで、な、パ
ーラウィズイレエヌという名に変えんか？ 婆さんが大切にしてく
れていたんじやから」

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8950h/>

水霊の巫女

2011年5月29日17時21分発行